目に見えぬ力 身近に

「命の尊さ 伝えたい」

寄稿 江角弘道 念仏とのご縁

1999年の暮れ、20歳の大学生だった娘と友達3人の乗った車は、飲酒運転の車に正面衝突され、娘を含む3人が帰らぬ人となった。だが、娘は私の心の中に生き続け、思い出すたびに悔しさ、悲しさが込み上げてきた。

娘の死から3年後、浄土宗僧侶で、東洋大名誉教授の河波昌上人の法話を聞く機会があった。その中で、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えることのありがたさを詳しく教わった。

「念仏を唱えると、般若心経の『空』の世界が開かれてきます。般若心経の冒頭の『観自在菩薩』とは、観世音菩薩（観音様）のことです。観世音菩薩の頭には阿弥陀様がいらっしゃいます。だから観世音菩薩は、ずっと念仏をなさって、『空』の実践をされているのです」と話された。

法話後、河波上人に「娘は、どこに行ったのでしょうか」と思い切って尋ねてみた。返ってきたのは「お嬢さまは観音様ですね」との一言。その時は「そんな尊い菩薩様などになってほしくなかった」と思った。

だが、「念仏して光明を経験すると『其れ衆生有りてこの光に遇うものは三垢消滅し身意柔軟に、歓喜踊躍して善心生ぜん（無量寿経）』という心境になり、身も心もとらわれがなくなる」との河波上人の話にすがるような思いで、毎朝の勤行前に、木魚をたたきながら念仏を唱えるようになった。「お嬢さまは観音様」との意味を考えながら。

1年ほどたった頃、以前から慣れ親しんでいる「般若心経」の一節「色即是空 空即是色」が突然、心に湧き上がってきた。「存在するものはみな空なり」と教えるこのお経が、念仏のリズムの中で鮮明にイメージできるようになってきたのだ。

確かに、私と妻が結婚する前には、娘はいなかった（「無」「空」という言える）。この世に生まれ、私たちと20年間、暮らした（「色」＝目に見える形のあるもの）。そして亡くなった（「無」「空」に帰る）。「娘が観音様になった」という言葉とも重なった。

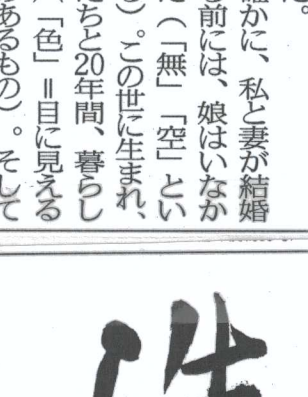
「観音様なんかになってほしくなかった」と思った頃、私はまだ娘を自分の中に抱え込んでいた。本当は仏の子であるのに…。観音様になった娘は、秋川雅史さんが歌う「千の風になって」の歌詞にあるように、大きな空を飛びまわり、私たちを支えてくれているように思えた。妻と各地の学校や公民館、寺院などに出向き、命の大切さや交通安全を呼び掛ける講演をするようになったのも、ちょうどこの頃だった。

8年前には、自坊の境内に高さ3・5㍍の観音菩薩像を建立し、娘の思いをくんで「交通安全観音」と名付けた。こうした前向きな思いが芽生えたのも、念仏をきっかけに、目に見えない大きな力の存在を身近に感じるようになってからだった。

娘との縁に感謝し、今この世に生かされている者として、命の尊さについてできるだけ語っていきたいと思う。

えずみ・ひろみち　臨済宗妙心寺派仁照寺住職。1945年出雲市生まれ。広島大大学院理学研究科博士課程単位修得満期退学。広島電機大（現広島国際学院大）名誉教授。92年から現職。著書に「いのちの発見～宗教と科学の間で」。

仁照寺の「交通安全観音」（出雲市斐川町）



題字は照峰馨元師＝臨済宗佛通寺派管長代務兼宗務総長（三原市）